はじめに1

国公立大・私立大の標準的な難易度でしかも良質な文章と設問を素材にした講座を編成しました。記述・選択肢・傍線部説明・空欄補充・知識モノなどバランスよく設問を選んでいます。また、既存のアーカイブ講座ではあまり扱っていない、**〈小説や随筆の記述問題〉**も一つ入れました。センター試験でおなじみの小説ですが、国公立大・私立大でも意外によく出題されるため、このタイミングで取り組んでおきましょう。なお、論説・評論の筆者は、それぞれの学問分野を代表し入試にも頻出という、いわゆる「学界のアイドル」ばかりです。読書的な価値の高い文章ばかりということです。

【このライブ講座からはじめて小柴大輔担当の現代文を受講する生徒さんへ】

論説も小説もすべての文章に対して**「対比（比較）」**注目するという、現代文読解と解答の方法を提唱しています。わかりやすく解説するよう努めてまいりますが、いきなりライブ参加の前に、アーカイブの何らかの講座をちょっと見ておくことをおススメします。**『センター対策講座』『スタンダードレベル現代文』『トップ&ハイレベル現代文』『高1・高2現代文**（「高1高2」という講座名ですが採用している問題はすべて入試問題です）**』**いずれの講座でもかまいません、第一講を視聴してウォームアップしておきましょう。ライブ講座を最大限実りあるものにしましょう。ライブ講座の後、アーカイブの続きを視聴し、入試用の現代文対策の学習習慣を定着させましょう。

はじめに2

過去のライブ授業にて、よくある質問

質問１：「現代文の知識事項、たとえば漢字や語彙の対策もするべきですか」
回答：するべきです！　センターであれ、国公立大・私立大の個別入試であれ、無視できない配点です。また論説・評論において問われる漢字は、重要概念であることが多く、文章理解とも直結しています。

質問２：「知識事項の勉強はどう進めたらよいですか」
回答：『**現代文〈重要語句・知識編〉**』という講座があります。テキストだけでもダウンロードしましょう。漢字・慣用句・口語文法・四字熟語・文学史さらに接続語の空欄補充問題もたっぷり練習できます。さらに文学史については『**早大現代文**』のテキストも参照してください。

なお市販の書籍としては、小柴大輔著『**読み解くための現代文単語**』（文英堂）があります。評論用語と小説用語の両方をカバーし、イラストも二〇〇カット！　また、評論と小説の読み方と解き方のコンパクトな総まとめとして、小柴大輔著『**一冊で現代文の読み方&解き方が面白いほど身につく本**』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）があります。合わせてご参照ください。

予習について

予習（問題にアタック）しましょう。**あえて時間限定せず、じっくり解答してもＯＫです。**

復習の仕方について

間違えた部分について、同種の問題が本番でも出題されるというつもりで、見直してください。

授業中のノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルを見る**　→　**テーマが判明する**ことが多い。さらには、「○○と○○」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくにセンター試験現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。ただし選択肢まで読んではダメ。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

★小説の問６のみ、選択肢まで読んだ方が有益です！

（3　**本文最後の数行を先に**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。）

1と2で充分な見当がつけば、4に移行してOK

4　**本文を冒頭から読む**

プランA……設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

プランB……プランAだとぶつ切りで文章理解のリズムが壊れるとお感じの人は、全文通しで読んでから各問に取り掛かってもよいです。とくに空欄補充をたくさん出す私立大と異なり、センター国公立大個別試験の場合は、まるまる文章を読ませますから、プランBもあり。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で**「A⟷B」**という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、**「C⟷D」**といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は**「善⟷悪」**という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、**「すべての○○は」「あらゆる○○は」**と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、**「○○のみ」「○○だけ」**と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょう）があります。例えば本文では「人間関係全般」について書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、**「○○であるべきだ」「○○にしなければならない」「○○する必要がある」**と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7　部分的指摘の誤り
……本文中では、「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8　記述に反する誤り
……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9　記述なしの誤り
……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10　文脈喪失の誤り
……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11　物理的スリカエの誤り
……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12　比喩を文字通りに解釈した誤り
……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13　具体例は、一段、落ちる
……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

14　比喩による説明は、一段、落ちる
……たとえで説明している選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっと明示的な語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

目次

第一講　随筆　記述編……p. 8

第二講　小説　記述編……p. 16

第三講　論説「映画論」……p. 24

第四講　随筆……p. 38

第一講　随筆　記述編

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえば小学生の子どもたちにとって時間の推移とは、四季折々の気象の変化ではなく学期の切れ目やそこに挿入された休暇の終結によってはっきり認識されると思うのだが、それでも道ばたで遊んでいる彼らが感知するのは、日没が少しずつはやまって影のぐあいが微妙に変化し、私が幼かったころにはほぼ普遍的な尺度であった「五時」というあの不思議な境界線の前後の明暗ではないだろうか。勝ち負けがへんな①しこりを残さず順繰りに動き、最後には誰もが公平さを学ぶことになるような原始的な遊びに興じて時を忘れ、ふと気づくと校庭や公園のラッパ型スピーカーから音楽の流れてくる時刻が一時間ほどはやめられている――そんなとき彼らは、冬の休みが近いことを肌で感じ取るのだ。

ちょっと前まで夜の七時から放映されていたアニメ番組の再放送を見るためあわてて家路につき、夕御飯を食べて湯を浴びたあとは形だけ宿題をこなしてふたたび受像機の前に座り、やがて起きている権利のない九時か十時に差しかかると、自分で決めたわけでもない翌日の時間割をあわせて布団に滑り込む。かつての子どもの日常はそうしたおおらかなリズムで過ぎていったはずなのだが、それが単調だと悩むことなどなかったし、母親にしても外で働いているのでなければ一日の時間の区切りは子どもの生活に合わせてあるのだから、おなじ言葉をおなじ時間に発していてもべつだん不服はなかっただろう。それは正しく引き受けるべきA幸福な単調さと呼ぶべきものであって、運動会や遠足や文化祭や卒業式などの、季節ごとの学校行事の規則性にひそんでいる退屈さにも似た、どこまでも均質な時間なのだった。

反復される変化の間隔が年ごとにみじかくなるのは、双方の、つまり子どもの側と両親の側の加齢によるものだが、平板な日々のリズムを寸断し、子どもの心を静かに揺さぶるような事件は、残念ながらまことに少ない。身近な人の死であるとか、親しかった友だちの転校であるとか、生々しい不安や苦痛を与える出来事は考えられても、なにか奥深いところでうごめく病巣（びょうそう）に比しうるような胎動（たいどう）は、目先を流れていく時間に埋もれて、なかなか見出しづらい。長じてから思い出される幼年期は、B平らかな日々の移りゆきをかならずしも平らかでないと感じていた当時の気持ちに、甘く収斂（しゅうれん）されてしまいがちである。

ところがたったひとつ、これも暦に支配されたものながら、他とは性質の異なる体験がある。春夏秋冬の行事に関係なく定められ、さまざまな特権をいちどきに味わう場。一歳だけ年を重ねるために必要な日付変更線。すなわち、誕生日である。私自身は年のあらたまる中途半端な季節に生をうけたため、いわゆる誕生日会と呼ばれる催しとは縁が薄かったのだが、今春、まだひと桁の年齢を祝う誕生日に少数の《お友だち》を招いたときの娘の興奮ぶりを見て、それがどれほど平常の時の流れから遊離した特殊な事件であるかに、いまさらながら気づかされたのだった。「ほとんど理解できない不思議な経験に最も富んでいるのは、やはり誕生日であった。区別をしないのが人生の常であることは、僕もすでに知ってはいたが、誕生日の朝はやはり楽しい一日を予期しきって起きた」と書いたのは※『マルテの手記』のリルケだが、たしかにその朝は、Cお祭りやクリスマスなどともまるでちがう気圧のなかにひろがっていたのである。

それにしても、すべての日常から外れて、期待と不安に満ちた一日を、私はどのように失っていったのだろうか。誕生日がもたらす新鮮な軋（きし）みを、いつからのっぺりした日々の波に返してしまったのだろうか。娘の様子を見ていて最初に思ったのは、そんな誕生日の喪失であった。夢見ていた特別の一日の崩壊は、自身の失態によってもたらされるのでも、子どもっぽさに突然嫌気がさす時期と連動している成長過程によって生じるのでもなく、いつのまにか訪れたとしか言いようがない地滑りのごときものなのだ。

いや、もしかするとその幕引きは、大人の手によってなされたのかもしれない。「まだ目がさめきらないうちに、部屋のそとで誕生日のケーキがまだとどけられていないと大声で言っているのが聞こえたり、お祝いの品々をテーブルへならべている隣室からなにかこわれる音が聞こえたり」する大人たちの失敗は、「僕たちが子供から大人になる手術」なのだとマルテは書いている。この手術を介して、それまで主役であった子どもたちは、自分を引き立たせてきた大人たちのことを考えはじめるのだろう。誕生日の意義がここで逆転する。子どもは祝われることをやめて、うまく祝わせてやることに②心をくだくようになる。

③そつなく準備された一日。甘やかな期待とその充足は、なにからなにまで大人たちが不都合のないようとりはからってこしらえた筋書きだったのだ。ケーキも、部屋の飾りも、贈り物も。誕生日の消滅はひとつの残酷な秘儀である。時の流れから突き出ていた空間がしなやかに裏返って、気ぜわしい日常に飲み込まれていく。「誕生日を救うことがなによりもの急務である」と詩人はさらに言うだろう。「大人たちから目をはなさずにいて、かれらの失策を未然に防ぎ、すべてをへまなくやっているとい

う大人たちの自信を強めてやることが必要」なのだと。

D お膳立てされた空間で、子どもは子どもである無垢な立場から追い落とされ、まがいものの自己をつくりあげなければならない。マルテの記述はたんなる懐かしさの奪回を意味するのではなく、もっと本質的な存在の根を洗い直せと訴える叫びなのだろうが、救いそこねた誕生日のぶんだけ子どもが大人に近づいていくのだとすれば、いつまでたっても大人になった気がしない私はあといくつの誕生日を反古にしたらいいのだろうか。

（堀江敏幸「誕生日について」）

※注

『マルテの手記』＝リルケの小説。一九一〇年刊。デンマーク生まれの青年マルテのパリでの手記の形式をとり、生の不安と孤独をつづっている。

問1　傍線部①〜③の語句の意味を説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―一〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問2　傍線部A「幸福な単調さ」とあるが、なぜ単調さが幸福なのか、本文に即して説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問3　傍線部B「平らかな日々の移りゆきをかならずしも平らかでないと感じていた当時の気持ち」とはどういう気持ちか、説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問４　傍線部Ｃ「お祭りやクリスマスなどともまるでちがう」とあるが、どうちがうのか。最も適切に説明しているものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

１　年のあらたまる中途半端な季節の出来事であるという意味でちがう。
２　目先を流れて行く時間に埋もれて、なかなか見出しづらいという意味でちがう。
３　暦に支配されず、平常の時の流れから遊離した特殊な事件であるという意味でちがう。
４　新鮮な軋みをいつのまにか日々ののっぺりとした波に返してしまうという意味でちがう。
５　春夏秋冬の行事に関係なく定められ、さまざまな特権をいちどきに味わう場という意味でちがう。

問５　傍線部Ｄ「お膳立てされた空間で、子どもは子どもである無垢な立場から追い落とされ、まがいものの自己をつくりあげなければならない」とは具体的にどういうことか、本文に即して九〇字以内で説明しなさい。

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●筆者　堀江敏幸＝ほりえ　としゆき（一九六四〜）岐阜県生まれ、早稲田大学第一文学部フランス文学専修卒。東京大学大学院人文科学研究科博士課程、パリ第三大学博士課程で学ぶ。『熊の敷石』で芥川賞を受賞した作家であり、早稲田大学教授でもある。入試頻出で、『送り火』はセンター小説で、『煉瓦工場の退屈』は早稲田大文化構想学部（サプリの【早稲田大学対策講座・現代文】第一講に収録）で、『青空の中和のあとで』は東大で、『マルテの手記』に関するエッセイは慶應大文学部（小論文）で登場

語句

普遍＝ふへん→いつでもどこでも誰にもあてはまる
尺度＝しゃくど→基準・ものさし
不服＝ふふく→不満があって従えない
平板＝へいばん→単調でおもしろみがない
寸断＝すんだん→ずたずたに断ち切る
病巣＝びょうそう→病気に侵されている部分
胎動＝たいどう→本来はお腹の赤ちゃんが動くこと。転じて、何らかの活動が始まること
うごめく＝蠢く→たくさんの小さなものが動く
長じる＝ちょうじる→成長する
遊離＝ゆうり→かけはなれる

失態＝しったい→笑われるようなぶざまな行動
幕引き＝まくひき→役割が済んだとしてお終いにすること
秘儀＝ひぎ→非公開で行われる儀式
気ぜわしい→心がいそがしい。ゆとりがない
お膳立て＝おぜんだて→食器や料理などの準備を整えること
無垢＝むく→けがれがないこと
まがいもの→本物に似せたつくりもの
奪回＝だっかい→取り戻す
反古＝ほご→すてる・やぶる　反故とも書く

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

		①	②	③	④	⑤
（ア）	状況のスイ移を冷静に見守る	垂	推	睡	水	衰
（イ）	人権は普ヘン的な価値である	編	遍	偏	辺	片
（ウ）	最近の待遇には大変不フクだ	覆	副	複	復	服
（エ）	多様性がなくキン質化している	均	筋	近	禁	謹
（オ）	同じ表現をハン復して使う	版	半	判	反	範
（カ）	新たな社会運動のタイ動を見る	胎	体	耐	態	待
（キ）	発言の根拠が崩カイする	戒	怪	階	壊	解
（ク）	過去の失タイを後悔する	退	帯	態	滞	怠
（ケ）	伝統社会の秘ギを研究する	犠	議	義	戯	儀
（コ）	失われた名誉を奪カイする	快	回	解	界	会

模範解答

第一講　模範解答

問1　①　事後も残るわだかまり　②　相手を気づかうこと　③　不注意や無駄がないこと

問2　かつての子どもの日常にある規則性やおおらかなリズムの中にあるため、同じ言葉を同じ時間に発する繰り返しがあっても不服とはならないから。

問3　平板な日々のリズムを寸断し子どもの心を揺さぶる事件は少なかったが、学期の切れ目や休暇の終結によって時間の推移ははっきり認識するような気持ち。

問4　5

問5　子どもが大人に近づいていくとき、誕生日で祝われる主役であることをやめて、自分を引き立たせてきた大人たちのことを考えて、彼らにうまく祝わせてやるような逆転があるということ。

復習問題　模範解答

復習問題　第一講　模範解答

（ア）②　（イ）②　（ウ）⑤　（エ）①　（オ）④

（カ）①　（キ）④　（ク）③　（ケ）⑤　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）推移　（イ）普遍　（ウ）不服　（エ）均質　（オ）反復

（カ）胎動　（キ）崩壊　（ク）失態　（ケ）秘儀　（コ）奪回